テンプレチート？夢のまた夢だよ

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テンプレチート？夢のまた夢だよ

【Ｎコード】
Ｎ０２９９ＢＡ

【作者名】
リョク

【あらすじ】
目覚めたらリリカルなのはの世界に？
明らかにチート転生者も居るし、こっちには用途不明のレアスキルに聖王の鎧にばれたら殺されるであろう（自分が）ユニゾンデバイスのアギト……。
これは主人公がチート転生者のオリ主（笑）から逃げるお話である。

憑依先はクローン（前書き）

あけましておめでとうございます！！
つーわけで新小説を！！

憑依先はクローン

何時も通り起きる、それが普通だった、だけど今日は体が重く、それで居て暖かかった。体が何か温かい水に浸かっている様な感覚、いや実際に浸かっているのだろう。
重い目蓋を開けるととそこは研究所だった、本当にそれしか言えないのが辛い……。つかここ本当に何処？

「ゴボッ！？……ゴボ、ガボゴボ（ここッ！？……うぇ、器官に入った）」

器官に入ったが大丈夫のようだ。

「ふむ、正常に作動しているな」

「魔力も高い、成功のようだ」

目の前の科学者？みたいなのが喋ってるんだがよく分からない。
本当にここ何処？

六年後、あ？話が飛びすぎ？しょうがないよ、僕ですから。
まぁそんな話は置いといて……僕は魔法少女リリカルなのはの世界に居るらしい。え？分からないって？まぁ簡単に言えば僕はこの体に憑依したらしい。
その体は古代ベルカの王族のクローン、聖王オリヴィエのクローンらしいです。性別はちゃんと男です、女になってたら自害しますコレ絶対。
まぁ辛い訓練や実験は苦しいですが生きたいので何とか必死に生きています。
僕はヴィヴィオの成り代わりかと思ったんだけどここにはアギトも居たから絶対に違うって言う事だけは分かった。
そして僕はアギトのロードです、炎の魔力変換資質ですから使えます。
レアスキルは聖王の鎧以外にもあったりします、実質二つです。ですが使いこなせるかと聞かれたら使いこなせません、自動（オート）でも無いですし時間も少しですがかかります、それにこれは魔力ではないですし。

研究院達の話しを聞いて分かったのですが原作組、もとい原作キャラ達とは一応同い年です、あくまでこの身体の身体年齢と同じなだけですが。それに原作には居ない人もいた。
オッドアイのイケメン野郎、それに一無限の剣製《ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ》と言う名前のレアスキルが……。
どう見てもチート転生者です本当にハイ。

で、どうするか……。

「とり合えず脱走しよう、アギト」

「わかったぜマイロード」

このままじゃぁ殺されるからね、明らかにハーレム狙いだし……
アギトも狙ってるだろうし……。

フラグは知らないところで立つ

あれから二年、脱走は上手く言ったと言えば上手くいった。前々から考えていた事ではあったし計画は時間をかけて練った。事実逃げ出せたのだからそれは良かったのだろう。
で、今は地球……なんで？
正解は地球の常識しか知らないから、お金についてもだ。
憑依前は純粋な日本人、それに何故か地球に惹かれる。
「よし！魚でも取るか！！」
「楽しみにしてるぜオウカ！！」
とり合えずバリアジャケットを着てモリを持つ、デバイスは単純な西洋剣だ。それを背中に携え海に飛び込む、春先の海水は肌を刺すように冷たかったがバリアジャケットがそれを守る。目にはゴーグルを付けていたので海水は目に入る事は無く呼吸はバリアジャケットがカバー出来ている。
「（今日は少し遠くまで行って見るか）」
――思えばあの時あんな事を思わなかったら良かったんだろう……。

「よし、大量大量♪」

アミには大量ともいえる魚介類や貝類があった、これだけあれば三日は事足りるだろう……。
そして帰ろうかと思ったとき……。

「ん？何だあれ？」

海のそこに光る何かが有った。

「もしかしたらお宝かもしれない」

実際にこの二年間はお宝を見つけることもあった、少なかったとは言え質に入れ換金すれば大金にはなった。言ってしまえば経験だ。
そう思いながら海に潜り、光る物の近くに行く。光るものの正体は綺麗な日本刀だった。

「（何だ、外れか）」

だけど外れにしては綺麗な刀だ、むき出しのままなのに錆びてる様子が無い。むしろ新品のように光り輝いている。

「（まぁ持っておいても損は無いだろ）」

そんな感じで触った。

――その瞬間刀を中心に莫大な力の奔流が生まれる。

「ゴボゴボ！！！（やばっ……溺れる）」

急に海流が生まれその中に飲まれそうになる。
だが魔法を使い周囲を少しだけ蒸発させそのまま海面にでる。

「ぶは！！」

すぐに体に溜まっていた二酸化炭素を全て排出し酸素を取り込む。

「ぜぇ……はぁ」

息をしながら何とか自分のペースを取り戻す、魚や貝はちゃんと持ってきた。ただ明らかに原因である刀も持ってきていた事には驚いた。
刀を手から離そうとしたが取れなかった。
仕方が無く腕を切り落とそうと早まったことをしようとデバイスの剣を背中から抜いた。このときの考えは頭に酸素が回っていなかった為である勘違いはしないで欲しい。
その時、手から刀が外れそのまま剣に吸い込まれる、剣は形を変え先ほどの刀に変わった。

「……一体どういう原理だよ」

そう言いながら僕は島に帰るのでした、マル。ちなみに今は無人島暮らし、ナレって怖いね。

酷い事？お前が言うな！！

「ケホケホ……」

「大丈夫か？オウカ？」

あー、風邪引いた……。原因は恐らく昨日の海流に飲まれた事が原因だろうな。あれから体中に変な力が渦巻いている、もう一つのレアスキルと同じ力だから恐らく体外に放出はできるだろう。

「……今日は私が作るな」

「……あぁ、ありがと……アギト」

ああ、平穏だ。研究所暮らしが長かったからか今は平和が大好きだ、だけど何時までもここに居られるわけじゃない。
それに昨日の事もある、もしかしたらロストロギアの暴発とかになりそうだから……。
アギトもこっちに居る、あの転生者からは命を狙われるかもしれない。

「そろそろ潮時かな」

寂しく呟いた言葉は誰にも聞かれる事無く、響いた。

「もう朝か……」

風邪はもう治った、力も何とか安定したものになっている。そろそろこの拠点から離れないといけない。何時管理局が来てもおかしくない……だから……。

「……本当にここで魔力が観測されたんですか？」

外から声が聞こえる……同い年くらいの女の子の声だ、その声の主は……。

茶髪のツインテールの少女だった。

他にも金髪ツインテールとかショートの少女とか……。

なのは、フェイト、はやての三人だった。

「最悪だな……」

これが世に聞くご都合主義なら間違いなく神様を呪ってやる。

まぁあの銀髪オッドアイのチート野郎は居なかった、それだけが救いだろう。

「オウカ……」

アギトの小さい体が震えているのが分かる、僕のこの体を作りアギトと一緒に実験していた組織は管理局だった。偶然見つけた資料で知ったんだ。

だからアギトは管理局を信じなくなった、本来はシグナムの相棒になる筈だった子……。

僕はあくまで一割がそんな事をやってるだけに過ぎないと頭の中では理解している、頭の中だけだけどね。

「大丈夫、逃げられるから」

アギトを心配させないように抱きしめる。

「でも、でも……」

「大丈夫だから……」

自分の体も震えているのが分かる。

「あそこに移動船がある、それに乗れば……」

――逃げられる、そう確信してもやはり怖い……。

でも……。

「逃げなくちゃ……」

言う、言葉を紡ぐ……デバイスに名前は無かった、それを書き換えられ新しくなったこの刀の名前を言う。

「アマノムラクモ、ｓｅｔ　ｕｐ」

虹色の魔力が体を包み込む、バリアジャケットが構成される。
バリアジャケットは綺麗な赤い着物に白色の羽織、足はシンプルな靴、篭手もあり以外に丈夫そうだ。

「走って逃げる」

足から魔力を放出する、魔力は炎に変わり速度を上げる。

「おりゃぁ！！！」

洞窟から飛び出して海岸にあるもう一つの洞窟に置いてある次元移動船に乗れば良い。
いきなり飛び出したため三人に気づかれる、それでも逃げる。

「待って！！」

高町なのはが僕を止めようと声をかける、だけど止まってたまるか……！！

「待ってください！！時空管理局です！！話を」

今度はフェイト・Ｔ・ハラオウンが目の前に立ちふさがる。

「い、嫌だ！！！」

素直にはっきりとそう言う、そう言ったときのフェイトの顔が少し泣いていたが気にしない！
八神はやては遅い、つまりフェイトの隙を着いた今なら逃げられる。

「うおらぁ！！！」

「ぐふ！！？」

せ、背中がぁぁぁあああああ！！！！聖王の鎧があると言っても衝撃までは殺しきれないんだよ！！
誰！！？一体何！！？

「全く……手こずらせやがって」

背中に足を乗せるのは赤毛の三つ編み……守護騎士の一人ヴィータだ。
何でここに……って回りをよく見ればあの転生者以外全員居るじゃない……アンビリビーバボー！

「まぁ待てヴィータ」

ヴィータに声をかけたのはシグナムさん、ゴメンあんたの未来の相棒は僕の相棒です。

「やっと止まったの」

「うう……」

「泣きやんでぇなフェイトちゃん」

ああ、全員来てしまった……中には消えたはずのリィンフォースも……。

「おい！てめぇ！何でこんな所に居るんだ！！」

耳元でうるさい声出さないでくれ……病み上がりなんだから。

「待てヴィータ、流石にそんな口調では言えないだろう」

「そうだよヴィータちゃん」

『……アギト、今なら』

『ああ……』

「ねぇ君、名前教え「「ユニゾン・イン」」てッ！！？」

名前なんか教えない、教えてあげない！僕の平穏を乱す者には教えてあげない！！

そう思いつつも一時的にぶっ飛ばせたのはあくまでほんの一時。

「あれはまさか融合騎！？」

「リィンフォース以外のユニゾンデバイス……」

リィンフォースが驚き、はやても何か言っている。

「今のうちに逃げ……」

「てやぁぁあああ！！！」

ってまたかヴィータ！！？

「くそ！」

――ガキン！！

刀を鞘から抜き振り下ろされた槌を防ぐ。

「まさかベルカの騎士だったなんてな」

「アハハハハ、アンタとその武器合ってないね、幼いって言うか」

「ッ！てめぇ！！」

おお、こんなに簡単にきれた。

だけど遅い……。

「いや、アンタの体系じゃぁそれを使いこなせないんだよ、幼すぎてね」

そう言うとヴィータの首を掴む、もちろん絞める。

「ぐ！！」

そして水月に膝蹴り、デバイスを放した一瞬を狙いデバイスに斬りかかる。

――ザンッ！

デバイスを横に真っ二つにし、そのヴィータの首から手を外し腕で締め上げ刀で固定する押さえつける。

「ヴィータちゃ」

「動くな！！」

一括する、その一言で静かになる。
首に固定している刀でヴィータの肌を傷つけ」流血させる。

「全員解除しデバイスをこっちに投げろ」

「な、なんでこんな事をするの？」

なのはがそう言う。

「解除しろ、女」

だけど無視する、冷徹に……。

「駄目だなのは！こいつの言う事を」

――ゴキ

少し煩いので黙らせる、つっても首の骨を折ったわけではない。折れてないよね？

「ヴィータちゃん！！」

「黙れ」

なんか自分が悪役になってきたんだけど……。
まぁ良いよね。

「良いからとっととデバイスを解除して投げろ」

「……」

全員が解除してデバイスをこっちに投げる。
僕はヴィータを放り投げると相手のデバイスを海に向かって投げる。

「ユニゾン・アウト」

「おう！！逃げるぞ！！オウカ！！」

このまま逃げる、よし！！上手くいく！！

「……なんでこんな酷い事を……」

なのはが最後まで言っている。

……そうだ！

「お前等がそれを言うか？」

ここまで言っておけばもう僕達には関わらないだろ、原作キャラ以外の魔導師って大した事なさそうだし。

それに大した事無かった、恐らく転生者が弱くさせているんだと思う。

「もう二度と会わないことを願いな、今度は殺すから」

「何やってんだよ！！管理局の連中と話すなよ！！」

あ、ヤバイ。アギトが泣きそうになってる……。

「ゴメンね、アギト、少し腹がたったから」

「それならいいんだけどよ……」

取り合えず僕達はこの場から放れて船に乗り込む。

「行き先はランダムで、もちろん虚数空間以外でね」

そう言うと動き出す船、目の前は光に満ちていた。

桃色の光に

「なんでさ」

そのまま船は大破し、海に放り出された。

遺跡とかに迷ったら敵とかと遭遇するよね、嘘？しないって？？

「ぷは……はぁはぁ」

あの後漂流して何とか陸地？にたどり着いた……。陸地と居っても海の中にある遺跡に入ったら空気がある程度だったんだが。まぁ海に投げ出された時に追撃とかされたからな、主になのはに……フェイトは必死に追いかけてきたからな、結界を破壊して海に潜ってやり過ごした。だけどまさか海にまで砲撃するとは……恐ろしい。

なんという冷血さ……。

「でも逃げ切れたんだね」

「ケホケホ……、なんとかなぁ」

アギトも無事だったし、これからのことを考えないと……。それにしても……。

「ここ何処だ？」

本当にここ何処だよ……見た事も無い遺跡なんだけど……もしかしてまだ発見されていない遺跡とか！！？それなら俺が第一発見者になって……って駄目だ。僕戸籍持ってない。これなら不法滞在者になって罪に問われる……そんな事はあってはならない！！

「それはともかく……」

見た事も無い遺跡、謎の場所……コレほど心を躍らせる物はあるだろうか？否、無いであろう……考古学者じゃなくても探検してみたいと言う気持ちがあるだろう。

何が言いたいって？つまりは……

「探してみるのも一興かな？」

子供心を制御できない訳ではない、これは知識欲だ。たぶん……。

それに何故かこういう場所は昔から惹かれる。

「よし！じゃぁ探検しようか！！」

こうして始まった遺跡調査、中々楽しそうな始まりだった。

「ここってかなり古い遺跡だねぇ」

それに見た事も無い物質で構成されているし……それに良い匂いがする。

「でも良く見れば罠とか色々あるな」

「引っかかるなよ」

「分かってるって」

つかこんな分かりやすい物を含めても遺跡に罠があるってことくらい分かるだろうね、コレ世界の常識。

「まぁアニメや漫画とかならここで罠にかかる人が居るけど……」

「キャァァァァァァァァァァァァァァァ！！！」

「……おい、オウカ」

「聞こえないよ、僕には聞こえない」

そう、僕には聞こえない……。水樹奈々ボイスの少女の声なんか聞こえない！！

そう思いたいけど何故か何かが転がってくる音がするんだよね、うん……こっちに近づいてくるような音がするね。

「アギト、逃げよう！！」

「おう！！」

こんな厄介事には関わらない方が良い、逃げた方が良いに決まっている。

「あ！そこに居たんだ！！」

って何故か真・ソニックフォームになっているフェイトが居た。

真・ソニックフォームってＳＴＳじゃなかったっけ？

「なぜだぁぁぁああアアアアア！！！」

僕はバリアジャケットを着てアギトとユニゾンし、フェイトに背中を向けて逃げ出す。フェイトはそんな僕を見て追いかけてくる、その後ろにはアニメとかによくある巨大な岩の塊が転がってきていた。

「ちょ！！こっちくんな！！明らかにアンタを狙っているから！！」

「私だって好きでこんな事をしてるわけじゃない！！」

「いや、あんたが罠を」

――カチッ

何？今何押したこの子？

「あんた……まさ」

――ビュン！！

最後まで言い切る前に矢が投擲されましたよ。

ってあぶな！！

やっぱり原作キャラは疫病神だうん！！

「何で罠を押すのかなぁ！！かなぁ！！？」

「私だって好きで押しているわけじゃ……うう……」

「泣いたって許しません！！コレ絶対！！」

本当に何で泣くんだよ！！僕の方が泣きたいよ！！

……そういや

「ねぇ、何であの岩に攻撃しないの？魔法なら……」

「……さっきから試してるんだけど無効化される」

「マジ？そういや僕も魔法を上手く使えないような」

ってそれかなりピンチじゃない！！

「どうにかならないの！！？」

「少しだけなら足止めは出来るけど……」

「くそ……それじゃぁ駄目……」

アレなら壊せるだろうけど今の状態じゃぁ出す前に死ぬ……って

……もう行き止まり！！？

「嘘でしょ！！？」

ヤバイ！！だいぶ離れられたけどじきに潰される……。

くそ！！

「くそったれ！！」

壁を思いっきり殴る、それで壊せるのであれば苦労は無い……。

ただ音が向こう側まで響くだけ……この壁の向こうに空間がある？

「こうなりゃ一か八かの賭けだ！！フェイト・T・ハラオウン！少しで良いからあれ足止めしろ！」

「え？う、うん」

フェイトが頷き、バルディッシュを転がってくる岩に向ける……。

「すぅ……はぁ」

落ち着け、アレを出すのには体中が痛くなる……。まぁ今回は命の危険があるからしょうがないけど。

――理念を捻じ曲げ概念を破戒し理想を夢見現実を逃避……あらゆる事象を再現し星を目に写す。

……眩暈がする……吐き気も今来た。

なんでこんな厨ニ見たいな台詞を考えないといけないんだよ、ぶっちゃけ現実逃避だろ。

――太陽に接近し……繋ぐ。

「ッ！！ぐふ……」

やば、血が出てきた……。

体の感覚が無くなっていく感じだ……体の端から食いちぎられている感じ……何時まで経っても慣れない。

――アクセス完了。

よし、来たきたぁ！！

「ゴフ……」

口から大量の血が流れ出る、それと同時に空間が歪み壁に火がつく。
火は捻じ曲がり壁を破壊し吸収して大きくなる、それはそのまま向こう側まで開通した。
火はすぐに消える、元々そんなに長く出来ないからな……。

「あ……あがぁあああ！！！！」

体中に激痛が走る、そりゃそうだよねぇ……体の肉片が無くなっていくんだから……。
ってこのままじゃ僕潰される！！？

「危ない！！」

フェイトが僕を掴んで走る、どうやら向こう側は階段になっていたようだ。
フェイトは階段を登る、岩は階段の途中で止まり、そのまま下に落ちる。

「た、……助かった」

本当にギリギリだった、この時くらいは原作キャラに感謝くらいはしても良いだろう。
って

「元はと言えば僕の平穏な日々を壊した管理局の連中が悪いんじゃ

ねぇか……」

「……何でそういう事を」

「お前等が悪い、ほら、アギトも怯えちゃって……」

服の中で震えているアギトを抱きしめる。
フェイトはそれを見て少し心を痛くしたのか辛そうな顔になる。

「……嫌いなんだね、管理局の事」

「嫌いじゃない、心のそこから関わりたくない、聞きたくない、滅んでしまえば良いと思う」

これは本心、ぶっちゃけ無くなってしまえば良いとすら思ってる。

「そんなに言わなくても……」

「言うよ、いくらでも……。百害あって一利なしじゃぁ無いけど僕にとっては害の方しかない」

「……」

「あの実験からやっと逃げられたんだ、クローンとしてじゃなく人としての幸せを得たいと思うのは当然じゃない？」

「ッ！！まさか……プロジェクトF・A・T・E！！？」

フェイトが大声を上げる……そりゃぁねぇ……自分の出生に関する物だから見逃すはずがないよな。

でも僕にとってはどうでも良いことなんだよ……。

「つっても僕は大昔の人間のクローンらしいから」

「……貴方もスカリエッティの……」

「スカリエッティのせいじゃないよ、あれもクローンだよ。それもアルハザードのね」

「ッ！！？でも、スカリエッティは罪を！！」

フェイトは叫ぶ、そうでもしないと自分が何を目的に行動してきた全てを否定されないからだ。

そんな事はしないし僕にそんな発言力は無い、こんなの戯言、いや……戯言以下だ。

「それをアンタが言う？この世界を滅ぼしかけたのに」

「あ……」

「八神はやての持ってる夜天の魔道書の守護騎士達もだ、管理局に入局したら罪が償えるとでも？甘ったれるなよ、そんなんで罪が償えるのか？」

そう、二次小説とかではオリ主が守護騎士達は主に命令されてただけで仕方なく魔力を徴収していたとかで罪がなくなるのがあるけど……被害者側から見ればそれは溜まったもんじゃない、はやてもはやてだ。

自分も罪を被るとか言っているけど犯したのは守護騎士なんだ。

世界はご都合主義で出来ていない、悔しいけどこれが現実なんだ。

「それに守護騎士は人間じゃない、人間じゃないのに人間の法律で裁くなんて可笑し過ぎる」

「そんな事無い！！シグナム達は……」

「悪いけどあんたの意見なんか聞いてない、私から言わせれば貴方も守護騎士達もちゃんと罪を清算してない、ずっと犯した時のままだ」

きっと自分の目は本当に酷く冷たいんだろう、本当はこんな事は言いたくない。

「でも一つだけ言っておくよ、生きている限りは罪を重ね続ける事もできるし清算する事もできる……それに死んだら罪がなくなるわけじゃない、むしろ死んでからが辛いんだ……本当に清算したいなら自分の思いで行動しな、生きているんだろ？」

「まぁ、アンタは若いんだから地道に考えな。自分自身でね」

まぁ、自分で考えた方が一番良いんだけどね。

そう言いながら僕は立ち上がり上を目指す。

「マナさんのようにね」

まぁこれは余計な事だったかもしれないけどね。

「で、到着っと」

「……」

フェイトはすっかり喋らなくなった。
まぁ言いすぎたのが悪いかもしれない、でもアレくらいなら反論の余地はある。
でも、反論した所で何かが変わるわけでもない、これは世界の法則なんだから。
それは反論する事が出来るけど変わらない不変。

「何考えてんだ僕は……」

さっきから近づくにしたがい考えが変わっていく。

「……さっきはゴメンね、少し言いすぎた……」

「……」

「でもさ、お前って子供でしょ。ならもう少し子供らしく振舞えば良いよ、そうすれば気がつかなかった物も見えるはずだからさ」

まぁ自分の言葉は矛盾だらけだから、そんなに考えない方が良いよ。

「さて……ようやく着いたわけだけど……」

目の前にあるのは壁画？のような物だった。

山の上に剣と写輪眼の文様と太陽みたいな物を宙に浮かせている犬の様な物が画かれていた。

「何コレ？」

まぁ変な物には変わりない、取り合えず写真。

「よし、上手く撮れた」

綺麗に撮れた、けどさっきからフェイトが下を俯きっぱなしだよ。少しくらい元気にしたほうが良いな。

「お前が今何考えているのか分からないけど、人間か人間じゃないかなんて些細な違いだよ。それともなに？お前は自分が人間じゃないとか思ってるの？」

「違う……」

「そうだな、クローンは人間だ。人と同じで人を愛せるし憎む事が出来る。それにアンタは綺麗だからさ、クローンだと知っても好きで居る奴の方が多いんじゃないか？まぁそれで皆がお前の事を嫌いになっても僕は好きだぜ、時空管理局員としてのフェイトじゃなくフェイトと言う一人の存在が。話して楽しかったしね」

あの後何とか出られた……まぁあの壁画の横に階段が合ったからそのまま上ってきた。

「うーん、空気が美味しい！！」

アギトは今寝ています、フェイトは未だ俯いています。

「……じゃぁね、もう二度と会わないと思うけど」

そう言って立ち去ろうとした、その瞬間バルディッシュ鎌バージョンで首を押さえられている。

「な、何を」

「……すみませんが貴方を時空管理局員として……いえ、フェイトとして保護します」

あれ？ドウシテこうなった？

「な、何で？」

「貴方がさっき言った事です、時空管理局に捕まったら実験されるかもしれないんですよね？」

「う、多分そうなると思う」

この体は唯一の成功作品だし性能良いし……。

「なら時空管理局としてじゃなく、フェイトとして貴方を保護しま

す。大丈夫、ちゃんと世話するから」

あれ？目おかしくない？何ていうんだろう……要領オーバーでパンクしたと言うような感じだ……。

「あの？お願いですから逃がしてください？」

「駄目です、私が貴方を守るから」

「ねぇこれってスルーしてるよね！！僕の言葉を返してないよね！！？」

ヤバイ、本当にヤバイ……。

どうにかしてこの場を離れな……って、誰だあれ？

弓を構えてこちらを……あの剣てたしか……ッ！！？

「危ない！！」

宝具は絶対だと思われがちだが実際はそうではない（前書き）

携帯電話？じゃあ書きづらいでした。
そして一応転生者も出せました。

宝具は絶対だと思われがちだが実際はそうではない

俺は神崎大輝、所謂チート転生者だ。
貰った物はオッドアイで銀髪、ニコポ、高い魔力にエミヤの無限の剣製だ。だが最初は本当に酷かった、中身の無い空っぽの物しか作れなかったからな。
だが原作に関わってからはちゃんと宝具も投影できるようになった。
プレシアは救えなかったけどリィンフォースを救えたのは良かった。
おかげさまで原作キャラにも好かれている。
P・S事件はなのはの味方だった、フェイト側をについた転生者も居たがあそこまで欲望垂れ流しだとは思わなかった……。

闇の書事件でも転生者はいた。

両方とも牢屋のなかだけどな。

そもそもクロノをKYと呼ぶのが理解できない。

まぁ色々あったが俺はオリ主になった。
なのは達も俺に優しい、普通に話してくれるし一緒に遊んだりもしている。

だけどフェイトは違った、明らかに男を避けている明らかに他の転

生者にクローンだとか言われて脅されていた。フェイトをハーレムに加えたいけど今のままじゃぁ何もできない、幸いフェイトの中で俺は信頼できる人間らしい。でも今のままじゃあなんの進展もない。どうにかならないかと思ってたが転機が現れた
明らかに原作じゃあ現れない事件が起こったからだ。
まず間違いなく転生者だろう。

ただ俺はすぐに行けなかったためなのは達に皆で行けと言った。

だが逃げられた上相手がアギトを所有していることが分かった。
俺は急いで地球に戻ることにした、間違いなくそいつもハーレム狙いだと分かった。アギトを所有している時点で原作に接点を持とうとしていることか分かる。
そして地球に戻った瞬間にサーチャーで見つけた、フェイトと知らない奴が一緒に居るのが分かる。
俺はカラドボルグを投影する、だけどこれじゃあ威力が高過ぎる……。

そう思った俺はカラドボルグを地面に突き刺し矢を投影する。
弓は無駄無しの弓（フェイル・ノート）だ、これなら威力も申し分なくなる。

そして弓を構え、放った。

僕はフェイトを突き飛ばす、その際胸を触った。柔らかかった……
って違う！
あのオリ主が弓を構えている、地面にはねじ曲がって刺すことにし
か使えないような剣、カラドボルグが刺さっている。
フェイトが近くに居るからなのか射てないようだ。

「大輝！？なんでここに！」

フェイトは叫ぶ、どうやら予想外の事らしい。

「くっ！」

――ガキンッ！

刀で射られた矢を弾く、力を使うがいなせないほどでもない。
オリ主もどうやら今ので矢が効かないと判断したのか刺さっていた
カラドボルグを持つ、どうやらフェイトが怪我するのを覚悟の上で
使うつもりらしい。
後ろに居るフェイトの姿を見る、両手を地面につけふせている。
……どうやらフェイトは念話で説得したが断られたらし……。
つまり投降しても意味はないということ、まあ投降しても意味はな
さそうだけど……。

「……アギト、起きろ」

指でアギトを小突く、アギトは少し声を唸らせ目を覚ます。

「ん～、どうしたんだよオウカ～……ってなんだよあれ？」

「分からない、まぁあの攻撃を防ぐから早くユニゾンして」
「ってあれを防ぐのかよ！はぁ～まあいいや、じゃ」
「「ユニゾン・イン」」
まああれを防ぐのはかなり難しいけど防げないわけじゃあない、劇場番のＦａｔｅではキャスターが一時的とはいえ防いでいるのが例だ。
それにこの距離なら……。
「アマノムラクモ、カートリッチロード」
――――ガシャンガシャンガシャンガシャンガシャンガシャンガシャンガシャンガシャンガシャン！
「嘘！？カートリッチを十個も！！？」
フェイトが後ろで叫んでいるが気にしない、と言うより構うことが出来ない。
刀を鞘に納めて構える、狙いは一瞬……。
「駄目！逃げて！大輝のあれは本当に危ないから！」
フェイトが逃げても良い許可を出した、けど逃げる暇が無い。
それにカートリッチを十個も使ったんだ、今止めたら行き場を失った魔力は暴走して体を壊す。
「あー、無理」

一応フェイトに返事しておく。
集中したまま返答を待つ。

「どうして…？」

「今逃げたらあんたが食らうだろ？」

「確かにそうだけど」

「僕嫌なんだよね、傷つくとしっていながら逃げるのは、例え管理局でもね。まあこれは建前だけどね」

それに……。

「本当はこんな可愛い女の子を一度で良いから守ってみたいって感じかな？同じクローンとしてじゃなく一人の男としてね」

「ッ！？」

さあて、ようやく準備完了だ。これにうち勝てなければ俺は捕まって実験漬けの毎日に逆戻り……。
勝てば――――。

――チート野郎が剣を矢にする。

「蛇竜――」

鞘から刀を少し抜く。

――チート野郎の手が開き矢が放たれる！

「――一突ッ！」

鞘から刀を抜き、接近してきたカラドボルグ目掛けて突くッ！

カラドボルグに蛇竜一突が直撃する。魔力を全て一点に集中させる。

普通はカラドボルグなんかとぶつかり合えばこっちが折れる、実際この前のデバイスならば間違いなく折れてたと思う。

ただこの前の刀を取り込んで以来かなり強固になって切れ味も上がっている。

何かのロストロギアかは分からないけど宝具と打ち合える代物になっているらしい。

それに少しだけ角度をずらしている為真っ向からぶつかり合うわけじゃない。

それにアギトの魔力に聖王の鎧が体を保護してくれる。だけど相殺するには時間がかかる、その間に第二撃が来る。その前にカラドボルグを破壊する必要がある。

その為にも、もう１つのレアスキルを使うしかない。

「……アクセス開始」

体に走る激痛、肉何かにつまんでは千切られるような痛みが走りる。

「ッ！……アクセス完了！」

その言葉の後に炎が走る、その炎はカラドボルグを包み込み破壊する。視界は炎に呑み込まれ見えなくなった。

「ぜぇ……転移魔法…」

自分が立っている場所に魔方陣が現れる、少し時間がかかるとは言え確実に逃げられる手だ。

「……ま、待って！」

そう言って僕の手を掴むフェイト……。

なんで掴むの！！？って言いたいけどレアスキルの影響で今はしゃべれない。

そして炎が晴れるとチート野郎が紅い槍を弓で射ろうとしていた。

紅い槍と言ってもゲイ・ボルクかどうかすらも分からない、流石に視力にも異常が来ていたのかよく見えない。

だけど何故か分かった、あの槍かが非殺傷設定ではなく、殺傷設定でしかもそれがフェイトに当たると言う事が……。

それが分かった瞬間僕はフェイトをだきよせる。

「な、何を」

――ザシュッ！

「する……の？」

紅い槍はゲイ・ボルクじゃなく、ゲイ・ジャルグの方だった。

「――――ッ！！！」

ゲイ・ジャルグは右肩を容赦なく貫く。
肩に走るのは貫かれた痛み。
体が少しだけ動いたのが幸いだったのか、左手でゲイ・ジャルグを掴み捨てる。ゲイ・ジャルグはその直後に爆発する。

そして右肩から溢れる血液を止めることなく、転移した。

旅は道連れ世は情け、そして自分の行いは何時誰が見てるか分からない（前書き

旅行は楽しかったです！
ただ外が吹雪いていたけど……。
そしてベッドで寝ていたら落ちたらしいです。

旅は道連れ世は情け、そして自分の行いは何時誰が見てるか分からない

「く、ッつ～！」

「動くなよ、包帯を上手く巻けないじゃねえか……」

場所は林、チート野郎から逃げてきて十分、僕は普通の人体型になったアギトとフェイトに貫かれた右肩に包帯を巻いてもらっている。血はアギトに治癒魔法を使ってもらい止血した、アギト自身は治癒魔法が苦手らしけどこの体は治りが早い為すぐに治った。だけど右腕を動かすには後三日くらい時間がかかる。

その為にもホテルを借りないといけないのだが……。

「ねぇ、フェイト……さん」

「フェイトで良いよ」

「じゃあフェイト、二つ聞きたいんだけど」

「何？言える事なら話せるけど」

「僕を殺傷設定で攻撃した人の印象を教えて欲しいんだ、フェイトを含めた全員のね」

そう、これが聞きたい。
チート転生者の殆どは原作キャラから好意を寄せられる。
全員から好意を寄せられるのが多いけどもしかしたらあまり快く思っていない奴も居る筈……。
そいつを味方につけられたら……、まああくまでも最後の手段としてだが。

「なのはとはやて達は多分、ううん…間違いなく好意を持ってる」

予想は出来てたけど女性陣は敵か……。
だけど男性なら

「ユーノやクロノ義兄さんにザフィーラも信頼できる最高の友人って言ってた」

駄目か……、これは予想外だったな。
ユーノを淫獣、クロノをKYとか言って毛嫌いしてるかと思ってたけど……。
さっきの事もあるけどフェイトも……。

「私とアルフ、まあ私の使い魔なんだけど……あまり信用してない……」

それは以外だった、まさかフェイトがあまり信用してないとはね、アルフはそうでもないけど。

「へぇ、どうして？」

「……昔私が関わった事件、まぁ私のお母さんが起こした事件なんだけど」

つまりP・S事件の最中、もしくはその前後か……。

「続けて」

「うん、私が来たばっかりの頃にアルフと一緒に町を歩いていたんだ」

「それで？」

「……アルフが血の臭いがするからってその場所に行ってみたら」

あ、成る程……分かった。

「人を殺していたと」

「うん……」

で、それを言おうにしても証拠が無い。
それに信用されている男が殺人等と言うふざけた事をする筈が無い、と言われるだけだ。

「まぁそれじゃぁ信用するなんて無理だわな」

そりゃぁ無理に決まってるだろう、殺人を犯した相手を信用しろと言う方がヤバイ。
一般人がアニメや漫画を見て共感するのとは違い、実際に起きた事件で私利私欲の為に殺したとなれば信頼なんて失せるに決まっている。

「はぁ……、かなりヤバイな……」

このままじゃぁ本格的にやばいからな。

「……ねぇ、時空管理局に捕まればなんだよね……」

「？まぁそうだな」

どうしたんだ？フェイト……。

「ならさ」

僕はこの後フェイトが言った言葉に度肝を抜かれた。

「……確かに、それなら……でも……僕も危険だしフェイトも巻き込むことになる」

「ううん、私達が貴方の事を……それに殺傷設定で放った事もあるから……」

ああ、しょうがない……今はフェイトの言う事を聞こう。

「アギト、嫌かもしれないけどフェイトの言うとおりにしよう……」

「私はロードの言う事に従うだけだ！それにこの金髪は信用できる！」

「どうやらアギトに気に入られたようだね」

アギトが管理局の人間なのに懐くなんて珍しい、でもフェイトは信頼できる。
だからなのかフェイトと一緒にいても嫌な感じはしなくなった。

「……そういえば何で私達の名前を知ってたの？なのはには女って」

「ああ、アレは脅しやすくする為に言っただけ……名前は研究所で」

本当にこういう時だけは便利な研究所、その名前を出すだけでフェイトは少し辛そうな顔をする。
まぁ本当は前世のテレビで……そういや何時見てたんだっけ？まぁコレだけ長い時間が経っていれば忘れるよな。

「じゃぁ……これからよろしく、フェイト」

「うん、よろしくねオウカ」

「フェイトちゃん……大丈夫かなぁ？」
なのはが心配している、だが大丈夫だ……フェイトはあの野郎に放ったカラドボルグの衝撃でぶっ飛んだ筈だ。
最後に放ったゲイ・ジャルグ以外は非殺傷設定で放った、アイツの死体が発見できなかったが直撃した証拠に地面には血があったからな。
「たぶんな、アイツが非道な事をしていなかったら大丈夫だ。それにフェイト程強ければ戦いだって持ち込めるはずだ、その時に魔力を探知できれば」
「うん……そうだよね」
どうやらその転生者はかなり酷い奴らしい、ヴィータを迷い無く気絶させ人質にした。
それにそんなに酷い奴にフェイトは惚れない筈だ、ハーレムを狙って地球に来たんだろうが惚れるわけ無い、馬鹿な奴だ。
「なのはちゃん、大輝君！！フェイトちゃんからの通信が来たで！！」
お、はやてが来た。
それにフェイトからの通信も……どうやらアイツと一緒に居ないようだ。
「だけどな……暫く戻れそうにないようや」

「はっ？」
俺ははやての口から放たれた言葉に度肝を抜かれる事になる。

「ふぅ、これでよし」

「でも本当に良いの？フェイトまで巻き込む事になるけど」

「良いよ、それにあくまでも私の言うことに従っていれば大丈夫だから……」

フェイトが出した条件、それはフェイトの近くに居る事。
そしてあのチート野郎が殺人、もしくは殺人未遂の証拠を掴む為に協力すると言う事、アイツが僕の肩を殺傷設定で攻撃したという事だけではまだ無理らしい。と言うより証拠が上手く取れなかったらしい。
そして僕を使って証拠を掴むと……、つまり僕は魚釣りの餌ですね分かります。
でもフェイトに協力する代わりに僕とアギトは事実上管理局の預かり扱いになっている。
フェイトの近くに居ないと駄目になるが管理局員が来てもフェイト

に守ってもらえる、まぁ持ちつ持たれつの関係になると言う事だ。
だが所詮形だけ……、あのチート転生者が何か言えば原作組みは僕を襲うだろう。

「でもその服じゃぁ……」

「…あー、確かに」

今の服は言ってしまえばかなりボロイ、基本魔力を頼っていたし一人暮らしだったからこの服しかない。

「……取り合えず服を…」

「お金ならあるけどね」

そう言って札束を出す、換金していない宝石なども含めればかなりの額にはなる筈。

「……お金持ち？」

「まぁ一応富豪並にはあるけど……」

「……取り合えず行こう」

そのままフェイトに連れて行かれ服を四着ほど買った、安い服にしたかったが結構高い服になった。
そして何故かフェイトの服も……ぶっちゃければフェイトの服の方が……、一応人間サイズのアギト用の服も買った。

「じゃぁ次はご飯にしよう」

「……まぁ出費がでかかったのはしょうがないよな」
僕の服の出費だったわけだし、フェイトとアギトは女の子だ。
服は多い方が良いだろう。

ともかく、ようやくご飯だ。
既に日は暮れ始めているし……、長く居すぎると警察が職務質問とかしてきそうだからね。
そう思いながら歩き始める。

「そこのお嬢さんたち」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0299ba/

テンプレチート？夢のまた夢だよ

2012年1月5日19時47分発行